

過去・現在・未来の原典生諸君へ! (April 30, 2013)

原典研究所主宰 齋藤瀛涯

■2008年、原典研究所は、西洋哲学愛好者には遍く知られている斯学における最古にして最大の稀覯書、1578年刊行のいわゆるステファヌス版『プラトン全集』(Platonis Opera Quae Extant Omnia: ラテン語原題『プラトンの現存全著作』)を購入しましたが、その際、新・旧の原典生から思いもかけぬ多大の篤志が寄せられ、長年「独立独行」を旨として歩んで来た筆者および原典研究所に深い感銘と「原典語学」の更なる研鑽と実践への励ましを与えてくれました。

■そこで、2008年9月8日(それは、奇しくも「リーマン・ショック」の前週のことでした)、自ら寄付金募集の発起人たらんことを志願して諸方面への働きかけに尽力し、「原典精神」の発揚のために諸事万端に互って八面六臂の活躍を見せた当時の塾生代表、木村太亮君(東京大学・法科大学院)と連名で、筆者は上記全集の有する思想史的価値およびその文化史的意義を、また同君は募金活動についての経緯およびその成果を、それぞれの説明責任を果たすべくいわば「共同声明文」の形で略述し、併せて醸出に快く応じてくれた諸君を永く記憶に留めるため、敢えてその芳名を記し、謝辞に代えることとしたのです。

[この、いわば「第1回目」の原典生に向けたメッセージは、原典HPを参照]

■爾来5年。この間に容赦なく内外を見舞った幾多の苦難は筆者および原典研究所にも少なからぬ試練をもたらし、実際、教室存続の意義とその運営の可否とについて深刻な懐疑に苛まれた際に、向学心に溢れる塾生諸君の知的誠実さと熱意に救われることも一再にはとどまらず、また戦後60年余り弊履の如く打ち棄てられ、顧みられることのなかった「万古不易の叡知」を若い世代に語り継ぎ、かつその読解に不可欠な語学力の涵養を図る責務を遂に放棄し得ぬものと意を決し、孜孜として務めて、創設18年目を迎えることとなりました。

■以上の経緯と世の趨勢とに鑑み、熟慮の末、昨年末に上記『プラトン全集』と双璧をなす「もう一つのステファヌス版」、すなわち1566年刊行の『ギリシア主要英雄叙事詩人集』(Poetae Graeci Principes Heroici Carminis)の購入に踏み切り、当研究所の蒐書活動の掉尾を飾らしめ、有史以来の人文文学の真の淵源たる両「原典」を擁し、ここに最高度の知的空間を現出するに至りました。

■本書は、16世紀フランス・ユマニスム(humanisme=人文主義)の輝ける旗手、当代随一のギリシア語学者でもあるエチエンヌ(ラテン語名:Stephanus)家のアンリによって刊行されたフォリオ版全2巻の稀代の大詩集であり、第1巻は800余頁の全てがホメロスに、第2巻はヘシオドス以下15人の叙事詩人に宛てられ、先行諸版の不備を是正し、更に当時入手可能な全写本と「古注」類の綿密な校合に基づき、全頁 いわゆる「王のギリシア語活字(Grecs du roi)」を用いて些かの瑕疵もなく、美麗かつ入念に印刷された文字通りの極美本です。

■究極の「フランス・ブランド」たるこの初版本は、17世紀に製本技術の粋を凝らした大改修が施され、2巻が全1巻本として合冊されるに際し「総皮装・三方天金」の、優に一個の美術工芸品と見紛うばかりに華麗な変身を遂げ、そして今や重厚かつ堅牢な木箱に収められて、原典研究所に姿を現したのです。

■ところで、ここで前記2008年版と同様の一文を草しているのは、言うまでもなく、今回のステファヌス版『ギリシア主要英雄叙事詩人集』の購入に際して、新・旧の原典生から又しても多大の篤志が寄せられたことに対して、筆者が言い知れぬ大きな感動に襲われたことを何よりもまず報告し、心からなる感謝の意を表明すべき義務があると考えたからに外なりません。そこで前回に倣い篤志者の芳名を特記し、謝辞に代えることとします。諸君の前途に幸多かれ！

---

■なお、今回の募金活動は、幹事発起人である現塾生代表、大江弘之君（東京大学・法科大学院）および前回時の幹事代表、木村太亮君（前出）の、筆者および原典研究所に対する犠牲的献身と深切なる友情に全面的に依るもので、両君のこれらの無私な貢献とリーダーシップの見事さには、筆者としても、原典研究所の「来し方・行く末」を含め、多くの感慨を催さざるを得ませんでした。

■一般に、「古典の継承」に関する論著は、洋の東西を問わず、1) 書誌学的考証、2) 文献学的校訂、3) 目録学的解題、4) 伝承史的仮説、5) 文化史的表象などの種々の観点・分野やそれらの既知を前提とし、加うるに当該典籍（例えば、宗教聖典、文学・思想書、その他の学術書等）の類別に応じて上記の諸観点が錯綜して記述されるのが通例で、総じて言語学的・文献学的知見や世界史の概容に不案内な一般読者には、読解に困難を来すものが少なくありません。

■いわゆる「西洋によるサンスクリット語の発見」とシャンポリオンのヒエログリフ解読以降、19世紀に澎湃として勃興した「オリエント学」と「比較言語学」は、等しく考古学を有力な武器に加えつつ、日々増大する写本や出土史料を前に、紀元前8世紀のギリシアの吟遊詩人ホメロスの「英雄叙事詩」を人類文化の濫觴と見做す、ルネサンス以降の「人文学の歴史」の大前提を根本的に覆し、人類の「知的営為の起源」を更に2千年余も遡らせることとなりました。

■とりわけ古典文献学は、「新約聖書」文献学を中心に、他の人文諸学には類を見ず、自然科学に勝るとも劣らない精緻かつ厳密な方法論を確立し、従前の「流布本 (the vulgate)」を廃用に帰し、新たな校訂本を産出し続けているのです。

■しかし、独り研究所の書斎で両書の来歴について思いを馳せる時、先ず筆者の眼前に髣髴するのは、宏大な時空を跨ぎ越し、夥しい天変地異と戦禍を潜り抜け、身を挺してこれらを後代に継承し続けた、恰も五輪の聖火ランナーの如き、無名かつ無数の人々の尊い姿です。塾生によるこの「リレー」こそ「古典継承」の奇跡的実現で、「原典精神」の真の発露であると誇らずにはおれません。

■下記の氏名一覧は、前回時（2008年版）の方式を踏襲し、ローマ数字による入塾年の期別表示と、進学先または在学中の大学名のみを記すこととします。

\* \* \*

■「寄付金の贈呈式」は幹事大江君の要望を容れ、かつ同君作成の「式次第」に則り、平成25年（2013年）3月16日、午後5時から、筆者および上記の新・旧両幹事を含む、総勢11名が参加して研究所の教室で執り行われました。

■その際筆者は、求められるがまま、原典研究所の蔵書の構成や性格、「文学と記述論との関係」、また従来はギリシア語学者の専有物であったホメロスに帰せられる「英雄叙事詩」を巡る諸問題が、「ヒッタイト学」や「ウガリット学」などによって今や新たな脚光を浴びていること（それらの最新の研究成果は、近着のM.Finkelberg編、“The Homer Encyclopedia, 2012”：世界初の『ホメロス百科事典』全3巻に詳しい）、更に「ステファヌス版」の原典研究所に対して有する意義等、些か多岐に亙る内容について、一時間程講義を行いました。

■この後、幹事より「寄付金の贈呈」が行われ、閉式後には予定通り教室内でささやかな懇親会が催され、最後に集合写真の撮影を行った後、散会しました。

■氏名一覧に関する表示や両「ステファヌス版」の写真等についてはHP参照。

### 【篤志者一覧】

|                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 阿部悠樹 XVI [東京大]   | 奈良崎翔太 XVII [早稲田大] |
| 稲塚大氣 VI [東京大]    | 二宮周蔵 IX [東京大]     |
| 稲塚万佑子 X [東京女医大]  |                   |
| 大江弘之 X [東京大]     | 布施俊輔 I [東京大]      |
|                  | 古田潤 XVII [早稲田大]   |
| 神尾雄一郎 V [慶應大]    |                   |
| 菊地宏治 XVII [東工大]  | 三村一貴 X III [東京大]  |
| 木村太亮 IV [東京大]    | 三森遼太 X [日本大]      |
| 熊倉潤 VII [東京大]    | 向川堯博 XVII [早稲田大]  |
| 五味太志 VIII [東京大]  |                   |
|                  | 山本修治 VI [千葉大]     |
| 齋藤静 I [慶應大]      |                   |
| 坂本恭太郎 X II [東京大] | 渡邊要一郎 X III [東京大] |
| 佐藤翔 VII [京都大]    |                   |
|                  | 総数 22名            |
| 豊田昂希 IX [早稲田大]   | 総額 224,000円       |